

上鳴の上位互換TSキャラがヒーローになる話

レベルアップ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルどおり。

容姿が常盤台のビリビリお嬢様な上鳴電気の上位互換オリ主がヒーローに至る話。

目次

入試試験

登校

1

12

彼女の名前は上鳴電子^{かみなりでんし}。個性《電撃》を持つどこにでもいるビリビリ女子だ。これはそんな少女が立派なヒーローに至る話。

早いものでもう高校受験だ。ついこの前まで小学生だった気がする。そんなことを考えながら、ほう、と電車に揺られながら電子は息を吐く。電子が受ける学校、それは天下の雄英高校だ。

雄英高校

倍率300倍、偏差値79という超難関校。ナンバーワンヒーローオールマイトを始めとしたプロヒーロー、エンデヴァーやベストジーニストなどの出身校であり、トップヒーローになるための条件は雄英高校出身であるかと言われるほどでもある。

なぜ雄英か。それは電子も例に漏れずオールマイトの人々を救う姿に憧れたからだ。故に将来の夢もオールマイトのようなヒーローになると小さい頃から決まっております。

だに揺らいだことは一度もない。

幸い、というべきか電子は生まれつき勉強ができるタイプの間だ。稀にいる、単語帳とか一度で大方覚えてしまうような、そういうタイプの人間だったのだ。

なので、模試では基本A判定だった。その為、みんなが勉強でひーこら言っている間に個性を鍛えて鍛え続けた。

昨日も夜の10時には寝たし、朝ごはんもバッチリ食べた。文句なしの最高のコンディションだ。

気がつけば、雄英高校の正門の前に立っていた。

「必ず受かってやる」

ライバルたちがひしめき合う戦場へ足を踏み出した。

雄英高校、その入試試験ともなれば、日本中から受験生が集まるため、筆記テストや実技テストの説明もそれに見合った場所で行われる。受験生はちようど筆記テストが終了し、実技テストの説明を受けるために雄英が誇る大きな講堂に集められていた。

「今日は俺のライブにようこそー！エヴィバデイセイヘー！」

プロヒーローであるプレゼントマイクの声が大きな講堂に響き渡る。

余談だが、この学校の何がすごいかというと、なんといつてもこの学校は教師が全員プロヒーローだということだ。現場で経験を積んだプロからの教えがあることは、他の学校と比べ、ヒーローを育成するにあたって大きなアドバンテージとなる。

何百という受験生が一同に集められたわけだが、これから人生が決まるといつても過言ではない試験が始まる前でそんなノリについていけない人などいるはずもなく、なんとも言えない空気が流れる。

しかしそんなことも気にせずプレゼントマイクはそのままのテンションで実技テストの説明を始めた。

まとめると、試験内容は敵^{ライバル}を想定したロボットを倒していくといったものだということ。ロボットは三種で、それぞれにポイントが割り振られているのだ。注意するべき点は途中で発動するギミックで、巨大なロボットが現れるとかなんとか。大きさが言われてないからどれほどのものか想定できないが、気をつけるに越したことはないだろう。

こんなの間けばわかるだろうにどこかの男子生徒がわざわざプレゼントマイクに質問したり、緑髪の生徒に注意したりとまあ色々あったが、特に気にすることでもない。

「俺からは以上だ！最後にリスナーへ我が校『校訓』をプレゼントしよう。かの英雄ナポ

レオン・ボナパルトは言った、「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と！
“Plus Ultra”！それでは皆、良い受難を!!」

ブルリと体が震える。きつとこれは武者震いなんだろう。恐怖なんて感じないし、むしろワクワクとドキドキを足したような気分だ。

絶対に受かってやる。私の未来のためにも！

バスでそれぞれ割り振られた試験会場に向かう。

到着したのは一つの街といっても差し支えないほど広大なフィールドだった。ビル群に公園など、よくこんなものを用意したなと感心する。

更衣室でジャージに着替えて、念のためポケットに行きつけのゲームセンターのコインを数枚入れておく。

屈伸や前屈などあらかた準備が終わったところで周りを見回す。

電子より準備運動を重ねて備える者、緊張した面持ちでカチコチになっている者、目をギラギラさせて興奮している者。様々な生徒がいた。態度だけではなく、その姿も十人十色だった。自分の個性が引き出せるようにそれぞれが工夫していることが目に

入った。

(さて、そろそろ始まると思うんだけどなあ)

そんなことを考えていると

『ハイ、スタート!』

プレゼントマイクのアナウンスと同時に集合地点から飛び出した。

受験期にトレーニングして鍛えた反射神経のおかげで誰よりも早く駆け出すことができた。

電気を身体中の隅々まで纏う。電流によって生み出された力場と鍛えた肉体により常人では不可能な速度で街中を走る。

ふと後ろを振り返って見ると、みんなぼけつとしており、電子が駆け出したのに気がつくが遅れて彼らも走り出した。

『ヒーロー! ブッコロス!』

「あつぷな!」

振り下ろされたロボットアームを上半身をそらすことで回避する。その間に前髪からパチツと電気を弾けさせるとそのまま敵ロボットを電撃で貫いた。

「まずは一点!」

電気を扱う上で発生する電磁波で、レーダーと同じ要領で周囲を索敵する。

動作するために電流が流れているロボット、そして角ばった形という条件で当てはまるモノ、反応36。

確認するかのように周りを自分の目で見回す。いつのまにか大きい十字交差点に居たらしく、四方からロボットが『ヒーローブッコロス』とか『ヒネリツブセ』とか言いながらじりじりと距離を詰めて来ていた。

先ほどと同じようにレーダーを使う。

周囲に人間及び他の動物の反応なし。

「安全確認よし、くらえ！」

髪から飛ばした電撃とは比べものにならない程の電気を両手を中心に纏う。スバチと一際大きく火花を散らさせたところでその手を地面に叩きつけた。

高電圧の電撃の波は、電子を中心に円状に広がっていき、電子を狙っていたロボットの回路やシステムをズタズタに破壊し、一掃した。

その後、後発組も追いつき、十字交差点ほどの大規模な戦闘はなく、サーチアンドデストロイを繰り返していた。

調子を落とすことなく街中を走る。

自分以外にも雄英に受かるためにと必死に戦っている人々が見受けられた。しかし、

まだまだ中学生。戦闘に離れていないようで、たどたどしいところが見受けられた。

その中に、細長い管のようなものが耳たぶから伸びている少女が目についた。耳たぶから伸びた管は音を聞いたりできる《個性》なのかはわからないが、そのせいで後ろから接近しているロボットに気がついていないようだった。

「危ない！」

足に纏った電気を弾けさせて、電子は耳たぶ少女に迫るロボットに飛び蹴りを喰らわせ、同時に電撃もお見舞いする。

「大丈夫!？」

「気づかなかった……ありがとう！」

「人助けもヒーローのお仕事でしょ！試験、頑張りましょう！」
そういうと再び走り出す。

数えるのも面倒くさくなるほどロボットを倒した電子。その間も他の受験生を助けたりして街中を駆け回った。

(そろそろおしまいだと思うんだけど……)

そんなことを思っていたその時。

ズドオオオオオ

ビル群をかき分けるかのように巨大な影が顔を出した。

角ばったデザインにセンサー類がいくつも取り付けられた頭部、大きい図体を動かすためにこれでもかと盛り込まれたモーターやアクチュエータ、それらは内側だけでは足りなかったのか外側まではみ出していた。

「0ポイント 敵……」

「にげろおおお!!」

「キヤアア!!」

入試会場は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。本当のヒーローならば、こんな状態でも立ち向かうものなのだろうが、彼らはまだまだ中学生の子供。事前にこういったものがあると伝えられていても、いざ直面してしまうと背を向けてしまう。

だが、こういうところでこそだ。

ある者が言った。

『考えるよりも先に体が動いていた』

その時の電子の頭の中は真っ白だった。いくら他の受験生とは違って訓練を積んだとはいえ、電子もただの女の子だ。

逃げなくちゃ

もちろんそう考えた。でも、この後のことを少し考えてしまったのだ。

その拳で何十人もを同時に葬れるほどの巨体が街へ解き放たれたら、一体どれほどの犠牲者が出てしまうのか、と。

もう何も考えられなくなっていた。

逃げるために巨大ロボットから反対側に逃げる受験生に背を向け、全速力で走る。自分の力だけではあの巨体に距離的にも時間的にも間に合わない。

そこで電子はふと昔読んだものを思い出した。

昔読んだ『電磁カタパルト』の理論。電子はそれを土壇場でやろうとしているのだ。

電気が発生すると同時に発生する磁力の力を合わせて電信柱を二本引っこ抜く。

「ふんっ！」

二本の電信柱のそれぞれの片方を地面に突き刺し、そのまま平行に並ぶように道に留まっていたトラックの荷台に立てかける。

固定されていることを確認すると、電子は電信柱に挟まれるような形で電信柱の間に立つ。

今の自分にできる最大出力の電気を纏い、同じく最大出力の磁界を発生させる。

左右の電信柱に伝わる電氣量を直感で調節して

高速で打ち出された。

登校

おそらく今日か明日に入試の結果が届くはずだ。入試の書類にもそう書いてあったし。

あの巨大ロボットを撃ち抜き、気を失っていた。目が覚めたのは雄英高校の保健室、リカバリーガールという保健の先生に介抱してもらっていた。

リカバリーガールの個性で気を失っている間にある程度直してくれたらしい。らしいというのも、特にひどかった両足と右腕は包帯でグルグル巻きにされており患部を見れなかったからだ。

「全く、どうしてこうも自分の体を傷つけるのかねえ……」

とりカバリーガールは言っていた。あの感じからすると、他にも体を傷つけていた人がいたのかもしれない。

リカバリーガールがいうには、傷は残らないそうだ。

そんなこんなで帰宅、その後風呂に入って速攻で眠りについた。

ちなみに、風呂場で傷を確認した時にはアザくらいになっていたので、治癒系の個性はすごいと思いつつながら瞼を閉じた。

翌日、入試テストの筆記試験の自己採点も終え、いつも通り学校へ通う日々を送った。そしてついに雄英高等学校と印字された封筒が家に届いた。

母は仕事場に泊まり込み、父は海外に単身赴任。両親は共働きなので、一人っきりの家を取り返して急いで自室の椅子に座る。机に封筒をおいて一度深呼吸をする。

いざ、封筒を開けてみれば中には一回り小さな封筒と書類、そして拳ほどの大きさの中央が窪んだUFOのような機械が入っていた。

(確かこれは、この前発表された新型の投影機だった気がする)

そんなことを考えながら投影機を机の上に置くと

『わーたーしーが投影された!!』

「うわ、オールマイトだ!」

そこには黄色のスーツを見に纏ったナンバーワンヒーロー、オールマイトが映し出されていた。その肉體、風貌。ただの映像であるはずなのにとてつもない迫力があつた。

どうやら今年から雄英高校の教師として働くことになったらしい。そのことのお知

「似合ってるわよ」

「えへへ」

電子の母、充鈴^{みすず}。乾電池程度を充電できる程度の電気を生み出すことのできる個性《充電》を持ち、子供を産んでから研究したいことがあると大学に入った女性。因みに大学は卒業しており、今は研究員として働いている。

家から遠く離れた学園都市というところで働いているのだが、娘の合格の知らせを聞くや否や、溜まった有給を使うため有給届けを上司に叩きつけると飛行機で帰ってきたのだ。

その日の晩御飯は回らない寿司だった。

「行つてきます」

「ええ、行つてらっしゃい」

そう言つて、電子は玄関のドアを開けて、新しい一步を踏み出した。

「おつきいわねえ……」

電子の目の前には壁と言われても差し支えないほど大きなドアがそびえ立っていた。

国立雄英高等学校ヒーロー科1年A組に在籍することになった電子。時間に余裕を持って登校したわけだが、教室に入ろうと思ったたら前述にもあるように大きなドアがあった。

「そっか、個性で大っきい体の人でも入れるようにか」

ドアに手をかけたところで

(こういうのは第一印象が大事か……)

いや、自然体で行こう。変に取り繕っても後で絶対バレるしそのほうが面倒だ。

「よし」

がらがら

室内を見てみると早めに来たおかげか半分くらいしか来ていなかった。

「えーと」

事前に送付されていた資料で座席を確認する。座席は出席番号順になっており、電子の席は廊下側から2列目の前から2番目の席だった。

スクールバックを机の横にかけると取り敢えず落ち着くために椅子に座る。

「上鳴、さん？」

ふと左隣から声をかけられた。

横を見ると見覚えのある細い管が見えた。それは耳たぶまで続いていた。

そう、実技試験中にロボットに後ろから襲われそうになっていたところを助けた女子生徒だった。

「受かってたんだね！あ、私は上鳴電子！」

「あの時は本当にありがとう！うちは耳郎響香！あー、同い年だしタメ口でも大丈夫？」

「全然大丈夫だよ。むしろそっちでお願いしたいくらい。これからよろしくね」

「ありがとう」

耳たぶ少女改め、響香はうれしそうにはにかんだ。

「自己採点何点だった？」とか「ヒーロー科って、何やるんだらうね」とか話してやいる間に次々と生徒が集まって来た。

特に教室に着くなり机に足乗つけて踏ん返り返っている彼。それを見るやすぐに注意に入る真面目な男子。の二人がうるさかった。こう、初めての高校生活で緊張とかな

いのだろうか。

最後に入って来たのは緑のもじやもじやへアーにそばかすの男子生徒とショートボブの髪をした女子生徒。

いや、よく見たら最初にあげた三人。

(入試試験当日に怒鳴ったり怒鳴られたり見ればわかるのをいちいち確認したりしてた三人だ。)

そんなことを考えていると

「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け……ここはヒーロー科だぞ」

声のした方を見る。緑髪とショートボブが立っていた教室の入り口、そこにあつたのは小汚い人相をした男性が入った寝袋だ。男性はそのまま懐からウイダー的なゼリー飲料を取り出すと一瞬で飲み干した。

全員に席に着くように促すと、寝袋から出てきて教壇に立った。

「はい、静かになるまで時間がかりました。時間は有限……君たちは合理性に欠くね。ああ、担任の相澤消太だ。よろしくね」

これが……担任？

雄英高校の教師はプロヒーローと聞いたのだが、こんな格好のヒーローを電子は知らない。

「早速だがこれ着てグラウンドに出ろ」

もぞもぞと寝袋を漁るとその中から雄英の体育着を取り出した。

まさか先生の、男性の人の人肌で暖められたものはないよな、と思いつながら机の横を見れば体育着が入った袋が掛けてあった。

それを確認すると安心するとともにため息をついた。

他の生徒が先生に質問していたが、入学式等は無し。行動は合理的に。とのこと。何をするのか伝えられてはいないが、取り敢えず更衣室に急ぐことにした。